

Sa iki jou ka machi i seki

佐伯城下町遺跡

西田病院駐車場地

病院施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

大 分 県
佐伯市教育委員会

序 文

大分県南部に位置する佐伯市は、近世毛利藩2万石の城下町が基礎となって発展した都市です。今回の発掘調査は城下町遺跡内での病院施設建設に伴い実施したもので、2度に渡る調査の結果多数の近世陶磁器類、土器類などと共に建物基礎とみられる石組遺構などが出土しました。調査地点は残存している絵図などから上級武士であった小林家の屋敷が存在した場所にあたり、出土遺構は当時の武家屋敷に関連するものと考えられます。佐伯市内では天祐館遺跡に次ぐ本格的な城下町の調査であり、非常に貴重な資料を得ることができました。

ここに調査の詳細を記した発掘調査報告書を刊行することができました。本書が、ひろく市民の皆様にも郷土の歴史に興味をもっていただくきっかけになると共に、近世考古学の調査・研究に寄与できれば幸いです。

最後に、本調査を実施するに当たり多大なご協力をいただきました医療法人慈恵会西田病院をはじめ、関係各位に対し、厚くお礼を申し上げます。

平成12年3月

佐伯市教育委員会 教育長 森 脇 一 郎

例 言

1. 本書は平成10年度（1998）に発掘調査を実施した西田病院増築工事に伴う佐伯城下町遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査地点は佐伯市大手町3丁目132番2に所在する。
3. 発掘調査は医療法人慈恵会西田病院の委託を受けて、佐伯市教育委員会が主体となり平成10年5月14日から20日までと平成11年3月11日から31日まで実施した。
4. 発掘調査、報告書の費用はすべて医療法人慈恵会西田病院が負担した。
5. 調査は佐伯市教育委員会社会教育課文化係の吉武敦子が担当した。
6. 出土遺物の整理作業は渡辺 薫（佐伯市教育委員会臨時職員）が行い、遺物実測、図版作成、浄書、写真撮影は吉武が行った。
7. 遺物の浄書及び一部誌の解説については長谷定子（佐伯市教育委員会臨時職員）の協力を得た。
8. 本書の執筆、編集は吉武が行った。

目 次

I. 調査の経緯と調査地点の歴史的背景	1
II. 調査の成果	2
A 区	2
B 区	3
III. まとめ	18

I. 調査の経緯と調査地点の歴史的背景

1998年4月、佐伯市教育委員会は医療法人慈恵会西田病院より佐伯市大手町で病院施設を増築するという連絡を受けた。建設予定地は佐伯城下町遺跡の範囲内にある西田病院駐車場である。工事は駐車場の一角にハリビロ棟を建てるというもので、建築面積は57.95m²であった。基礎工事のため1m程掘削するということから、市教委では遺構の有無を確認するための試掘調査を行った。その結果建物基礎と考えられる石列遺構が出土したため、病院側と協議を行い本調査を実施することとなった。調査期間は1998年5月14～20日、調査面積は21.3m²である。その後平成11年1月に再び西田病院より、前回の調査地点の隣接地に病院施設を建てるという知らせがあった。これを受けて試掘調査を行った結果、石組遺構が出土したため本調査に移行した。工事の範囲は193.5m²であったが病院職員の駐輪場と排土置き場確保のため、試掘時の遺構の出土状況を考慮し、実際の発掘面積は約59m²となった。調査は1999年3月3日～31日まで実施した。以後、1998年5月の調査範囲をA区、1999年3月の調査範囲をB区と呼ぶことにする。

さて、近世の佐伯は毛利藩2万石の城下町が築かれた地である。調査地点は堀を挟んで佐伯城に對面する上級武家屋敷の並ぶ一画に位置する。絵図の屋敷割と比較すると、元文3年(1738)の「御城・御城下絵図」では小林九左衛門、文政9年(1826)の「御城下分見明細図絵」では小林七郎左衛門、明治4年(1872)頃の「佐伯藩時代屋敷図」では小林隆吉の敷地に対応しており、江戸中期からは一貫して小林家の住居であったことが分かる。ちなみに小林家西隣は絵図の各時期とも一貫して佐久間家屋敷であるのに対し、東隣は黒木(元文3年)→西名(文政9年)→間(明治4年頃)と居住者が変わっている。小林九左衛門は6代藩主毛利高慶によって登用され、宝永5年(1708)に新知行80石を拝領して給人格となる。翌年には城普請の経理責任者に任ぜられたが、正徳元年(1711)職務に不審な点があるとして一族藩とも城下から追放された。その後享保3年(1718)赦されて復職し仕置用人に登用されるが、翌7年に死去した。子の典善は享保11年(1726)家老にまで進んでいる。年代的にみて、元文3年の絵図にある「小林九左衛門」とは典善のことかあるいはその子である可能性が高い。

参考文献 佐伯市教育委員会「佐伯藩史料 温故知新録二」1999
佐伯市教育委員会「佐伯市史」1974

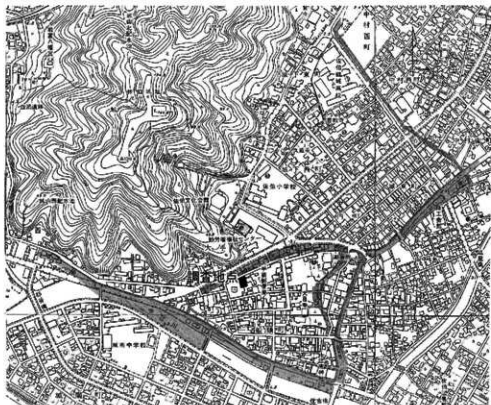


図1 佐伯城下町遺跡と調査地点 (S=1:10000)
アミカケ部分が堀で城下町の範囲はその内側

II. 調査の成果

A 区

A区は2.5×8.5mの略長方形で、面積は約21.3m²とごく狭小であった。調査は重機で舗装部分を剥ぎ取った後慎重に掘り下げを行い、地表面から約30cm下の遺構上面に達したところで人力による掘削に切り替えた。遺構は建物礎石と考えられる石列遺構と埋壘1基が、調査区の東側部分より出土した。調査区西側は火災で焼失した住居を廃棄したと考えられる土坑によって覆乱されている。覆乱坑からは昭和以降の陶磁器類やガラス製の醤油差しなどが出土した。その覆乱坑に沿って凝灰岩切石を三枚並べた遺構が出土したが、両者の関係については不明である。中央部からは遺構は出土しなかったが、明治期のものを含む遺物が出土している。

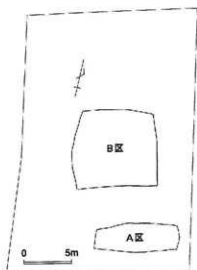


図2 調査区位置図 (S=1/400)

(1) 石列遺構

石列遺構には南北方向に並ぶ1号石列と東西方向に平行に並ぶ2、3号石列があり、2、3号は1号に垂直に接し東の方向に伸びる。検出長は1号石列が2.6m、2号石列が3.1m、3号石列が1.2mを測り、1、2号はさらに調査区外へ伸びる。構造的には1号と2号は比較的均質な大きさの石を上面が平坦になるよう配置しているが、3号は小さい礫を2列に並べて使用するという相違点がみられる。3号の検出長が短いことについては、調査区南東隅の幅1.5m、長さ2.0mの範囲を重機で掘削した時に壊してしまった可能性もある。遺構検出面で出土した遺物の年代から明治期の建物であると推定される。

(2) 埋壘

3号石列に接するように埋置されている。上半分、底部は欠失しており、体部下半分の一部が幸うじて残っていた。陶器の甕で出土状況から上記建物に伴う便槽として設置されたものと考えられる。甕の年代、産地は不明である。

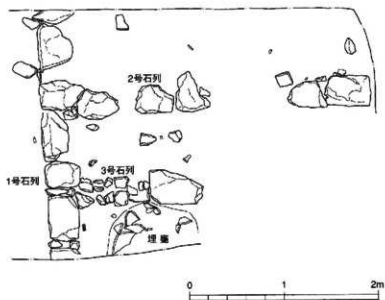
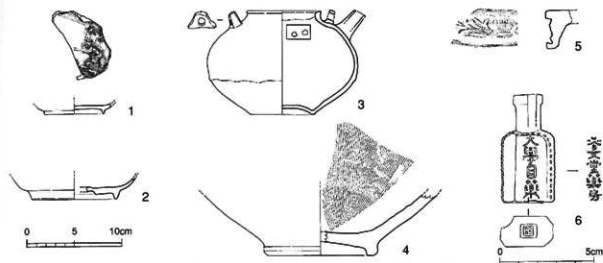


図3 A区遺構配置図 (S=1/40)



(3) 出土遺物

図4 A区出土遺物(1~5はS=1/4、6はS=1/2)

図4-1は肥前乗付磁器皿で内面に楼閣山水文を描く。年代は18世紀後半~19世紀前半である。2は肥前白磁輪花皿で底部は蛇ノ目凹形高台となる。年代は18世紀末~19世紀前半。3は陶器土瓶で上半部に緑釉が掛けられている。肥前産または関西産で19世紀前半の所産である。4は明治以降の製品と推定される産地不明の陶器摺鉢である。5は軒平瓦。瓦当文様は均整唐草文で、中心飾りが花卉状文、唐草の部分は線彫りの葉文で表現されている。19世紀以降のものである。6はガラス製の目薬容器で、前面に「大目薬」、裏面に「参天堂薬房」、底部に「田」という陽刻がある。「参天堂薬房」とは明治23年に田口洋吉が大坂に開いた「出口参天堂」のことで、大正10年の広告では「参天堂合資会社」となっている。現在の名称は参天堂製薬株式会社である。底部の「田」は創業者田口洋吉の田であろう。「大目薬」は明治30年(1897)に発売され、巧みな宣伝によって大ヒット商品となった。このタイプの容器は昭和6年に新しい容器に代わるまで使用されていた¹⁰⁾。

B 区

B区は7.7×7.7mの略方形で、面積は約59m²である。調査はA区同様重機で舗装部分と表土を除去した後慎重に掘り下げ、近世陶磁器類が出土する層に達した段階で作業員を投入して遺構検出作業を行った。時間的な制約から遺物は遺構出土のもの以外、層ごとに一括して取り上げを行っていった。遺構は石組遺構5基、コの字状に廻る石列遺構1基、瓦溜1基、土坑1基である。石組遺構、瓦溜、土坑は地表から約100cm掘り下げたところで検出したが、コの字状石列遺構はそれらより50cm程高い地点で出土している。遺構はほぼ調査区南半分に集中しており、北側では出土していない。調査区北側は部分的に擾乱されており、特に北東隅は大きく攪乱を受けていた。このことが遺構が出土しない原因とも考えられる。

遺構を完掘した段階で調査区南壁の土層の観察を行った。1層はアスファルト舗装とその下の砂利層である。2・3層は現代の造成上で、コンクリート基礎が埋め込まれており一部は4層まで達している。4層からは近世の遺物も多く出土したが明治期の遺物も含むことから近代の整地層と考えられる。5層は遺構検出層であり、17世紀初頭~18世紀後半の遺物が出土している。その中で主体を占めるのは18世紀後半のものであることから、5層は18世紀後半に形成された整地層であり、5層上面は18世紀後半~幕末にかけての生活面であったと推定できる。6層は砂層(地山)である。佐伯の城下町はほとんどが初代毛利高政入部後の埋め立てによって築かれており、6層自体は近世以前の下海であると考えられる。今回6層遺物として取り上げたものは、大きく分けて調査区南西部の遺物集中部と北東角部トレンチ内の2カ所から出土したものである。遺物の年代について、両者とも19世紀前半まで下るものを含み5層よりやや新しい様相を呈する。このことは遺物集中部としたものが5層上面から掘り込まれたゴミ穴であった可能性を示している。一方後者についてはトレンチが攪乱部分と接しているため流れ込みである可能性が高い。

5組遺構

-4号はほぼ等間隔に方形に配置されており、5号も2号と同一ライン上に並んでいる。1、2、5号石組から人頭大の礫を中心に構成されているが、3号は0cm程度のやや大きいものも含む。これに対して4号礫と瓦片で構成されている。石組は1・5号以外やまりを欠くものの、配置から推定すると礎石下の根子として埋設されたものと考えられる。出土遺物は5組18世紀後半のものが大半を占めることから、5層並以降に建設された建物の基礎であると考えられる。

号石列

E区の西端に位置する。平面形態は30~40cm前後の1の字状に配し、内部はやや残りは悪いものの礫によって区切られていた様子である。遺構はさらに調査へと続くため全体の形状は明らかではない。また石列部分は攪乱により礫が抜き取られている。石列のレベル3の石組遺構や瓦溜などより50cm程高く、5層上面にされている。遺構の南側には円形に焼土が検出され1物の時期から遺構の年代は18世紀後半と推定され

号瓦溜

3号石組の同一線上にほぼ同じ間隔で配置されている瓦を敷き詰められたような状態で所々に陶磁器類も混じった。遺構の性格は瓦を廃棄したゴミ捨て場と考えるのが的であるが、出土位置からみると根元め石と同様建1である可能性も残る。時期は18世紀後半以降に比定

号土坑

器、土師質土器、貝類、獣骨などが出土しており、ためのゴミ穴と考えられる。貝の種類はアカニシ、リ、アワビ等である。出土遺物から18世紀末~19世紀に形成された遺構である。

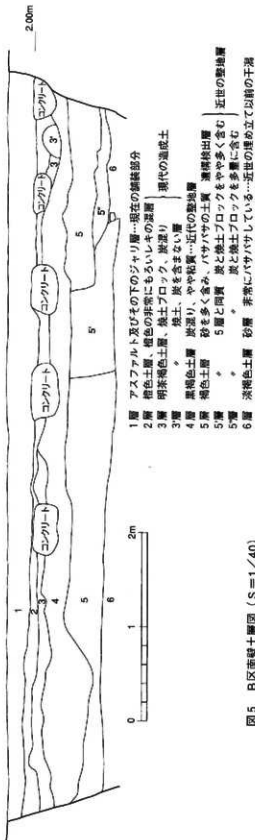


図5 B区南端土層図 (S=1/40)

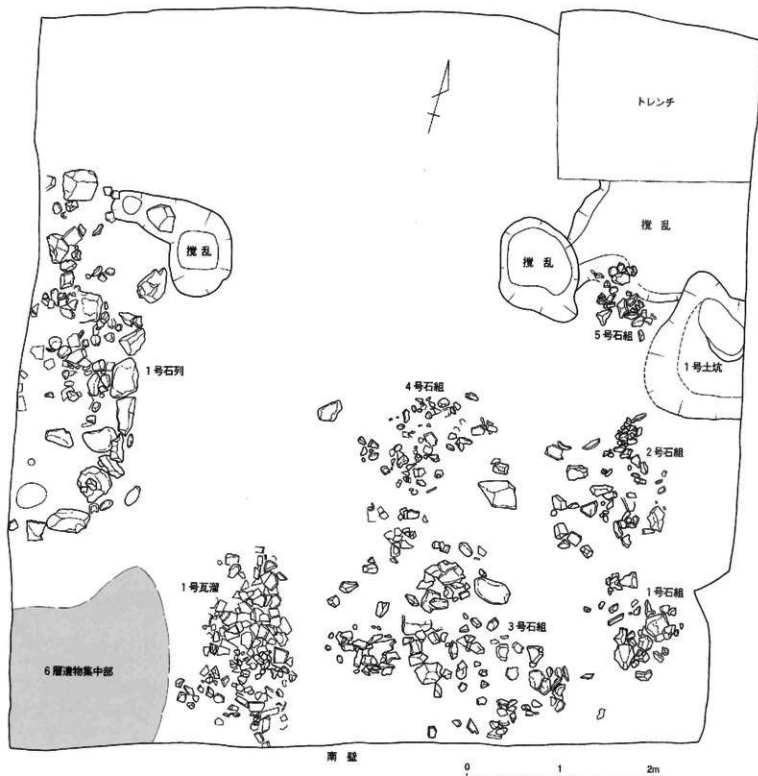


図6 B区遺構配置図 (S=1/40)

(5) 出土遺物

4層 図7-1・4は肥前染付磁器碗である。1は外面に牡丹唐草、内面に四方禪文をもち、18世紀前半～中頃に比定される。4は外面に若松文を描き、年代は18世紀中頃～後半である。2は透明釉の掛けられた関西産の陶器碗で18世紀後半以降の製品。本遺跡からは同タイプの碗がかなり出土している。3は産地不明のの陶器碗である。外面に白化粘土を掛けその上から呉須で竹を描いている。18世紀代の所産と推定される¹⁰⁾。5は18世紀代の肥前白磁猪口。6～8は肥前染付磁器皿である。6は内面に草花文をもついわゆる初期伊万里の皿で、1630～40年代に比定される。7は内面菊花文、外面連続唐草文が描かれた18世紀後半のもの。8は18世紀前半の製品で同一形態、文様の皿が1号瓦溜から2個体分出土しており、組み物であった可能性がある。文様は内側面に窓絵花片文、見込みに植物、外面に連続唐草文となっており、本例では欠損しているが1号瓦溜出土例から「大明年製」銘をもつと推定できる。9は唐津系陶器二彩手皿。鉄軸と緑釉で内面に文様を描く。17世紀後半～18世紀前半の製品。10は肥前染付磁器水滴、18世紀後半以降の製品であろう。11は色絵磁器合子蓋で上面に「鹿・」と書かれている。2文字目は下半部が欠失しているが「印」に似ていることから「鹿印」とも読め、薬または化粧品の商品名か製造元の名称の可能性がある。明治以降の瀬戸美濃産。12は堺産陶器猪鉢。見込みの猪目がウルマーク状になると考えられることから、18世紀後半に比定される。

5層 図8-1～4は肥前染付磁器碗である。1は山水文をもつ高台内無袖の碗で1640～50年代の製品である。2は薄手の丸碗で18世紀前半～中頃のもの、3は長崎の波佐見で大量生産されていたいわゆる「くらわんか手」といわれる18世紀代の雑器である。4は外面に竹文、見込みに五弁花を描く1780～1810年代のもの。5は唐津系陶器刷毛目碗で17世紀末～18世紀前半の所産である。6は関西産陶器筒形碗で、鉄軸で漢詩が書かれて

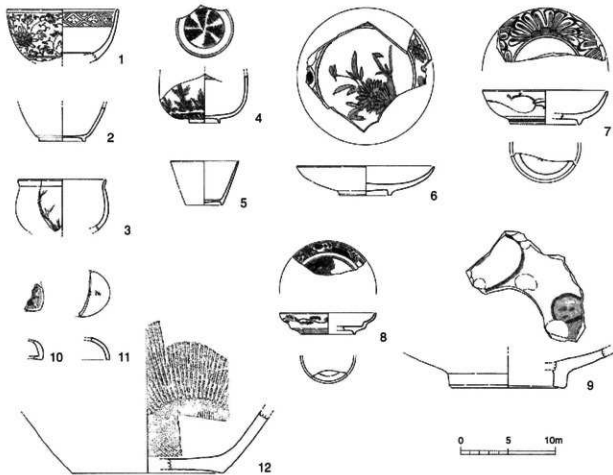


図7 B区4層出土遺物 (S=1/4)

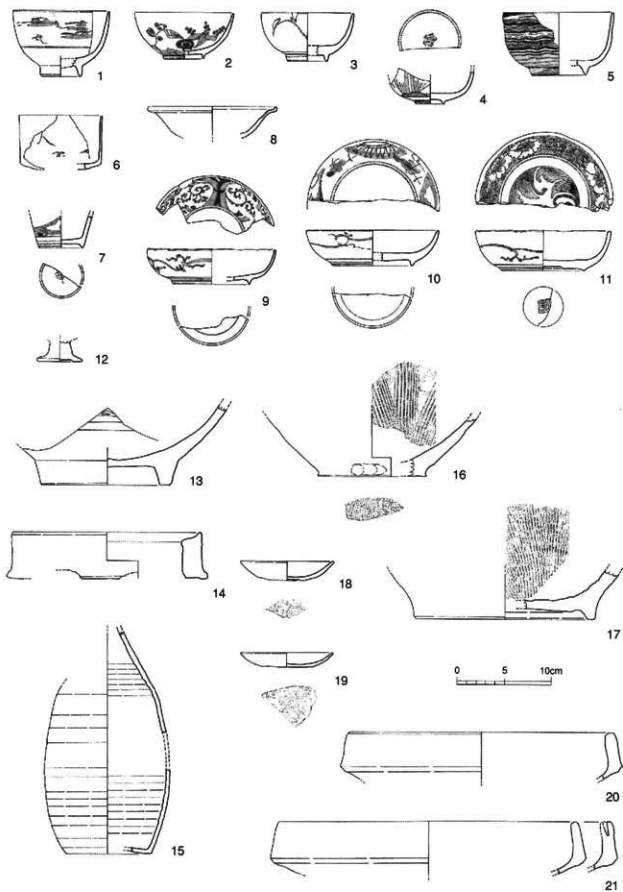


图8 B区5层出土遗物① (S=1/4)

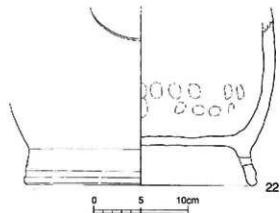


図9 B区5層出土遺物②(S=1/4)

仏飯器である。13は唐津系陶器刷毛目鉢で見込みに重ね積みのための砂を凹形に置く。年代は17世紀後半～18世紀前半。14は器種、年代共不明な焼き締め陶器である。上部は何かの受部のような形態で足をもつ。色調などから備前系の製品である可能性もある。15は備前系陶器瓶で外面に鉄泥を掛ける。18世紀代のもと考えられる。16・17は陶器撰鉢で前者は唐津、後者は堺産である。唐津産の方は擋目の間隔が広く糸切り離しのままの平底で、1600～50年代の所産である。堺産の年代は18世紀前半～中頃である。18・19は底部回転糸切りの土師質土器小皿である。19は右回転糸切り離して、口縁部にスガが付着していることから灯明皿として使用されていたことがわかる。20・21は土師質土器焙烙で、21は口縁端部に1カ所把手が変化した貫通しない孔をもつ。これは完全な形であれば向かい合う2カ所にあるものである。図9～22は土師質土器焼炉で正面に火窓、高台部分の向かい合う2カ所に孔をもつ。体部内面には指オサエの跡が顕著に残る。関連資料として、大分市の府内城三ノ丸遺跡で19世紀前半～中頃に位置付けられるS K 33・S K 34から同形態の瓦質土器が出土している。土師質土器の例としては関西で同様のものが確認されており、18世紀後半に比定されている⁹⁾。18～22の土師質土器についてはいずれも在地産の可能性が高い。

6層 6層出土遺物については南西角遺物集中部とトレンチ内出土のものに分けて記述する。

①遺物集中部 図10-1は18世紀後半～19世紀初頭の肥前染付磁器筒形碗。2は関西産、3は瀬戸美濃産の陶器碗である。前者は色絵で松文が描かれており、後者は鉄釉が掛けられている。いずれも18世紀代の製品である。4は肥前染付磁器小杯で外面に花散らし、氷裂地文を描く。18世紀代のものである。5は18世紀後半～19世紀前半の肥前染付磁器紅皿。6は肥前染付磁器皿で、5層から同じものが出土している。5層出土のものでは欠損していたが、見込みに五弁花、高台内に渦「福」銘をもち、18世紀前半の所産である。7は肥前青磁火入れで18世紀中頃～末の製品である。8は関西産の陶器土瓶で外面に鉄絵で植物の文様を描く。口縁部と体部は接合しないが同一個体と思われる。18世紀後半以降のものである。9は唐草文の肥前染付磁器瓶で、18世紀代のものである。10・11は堺産陶器撰鉢で前者が18世紀前半～中頃、後者が18世紀後半に比定される。11の内底部には焼き台の痕跡がみられる。12・13は右回転糸切りの土師質土器小皿、14は5層出土のものと同形態になるとみられる土師質土器焼炉である。14の風通し孔は本来7個あったものと推定される。15は土師質土器焙烙で口縁端部に1カ所把手が変化した貫通しない孔がある。土師質土器は在地産と考えられる。

②トレンチ内 図11-1は18世紀末～19世紀前半の肥前染付磁器蓋。外面に山水文を描く。8は蛇ノ日凹形高台で内面に蜻蛉草、見込みに十字花を描く。18世紀末～19世紀前半に比定される。3は土師質土器焙烙である。

いる。18世紀前半～後半に比定される¹⁰⁾。7は17世紀末～18世紀前半の肥前染付磁器猪口で、高台内に渦「福」字銘をもつ。8は唐津系陶器溝縁皿で1610～30年代の製品。9～11は肥前染付磁器皿で、9は内面に唐草と梨斗、外面に連続唐草を描く。同一形態、文様の皿が6層からも出土しており組み物であったと考えられる。年代は18世紀前半。10は内面に菊花、外面に連続唐草文をもつ18世紀前半～中頃の製品である。11は蛇ノ日凹形高台で、内面に渦花、見込みに波を描き高台内に「筒江」銘をもつ。青色がやや明るく発色する呉須を用いたもので、18世紀後半に比定される。石組遺構から同一形態、文様のものが出土しており組み物であったと推定できる。12は18世紀代の肥前磁器

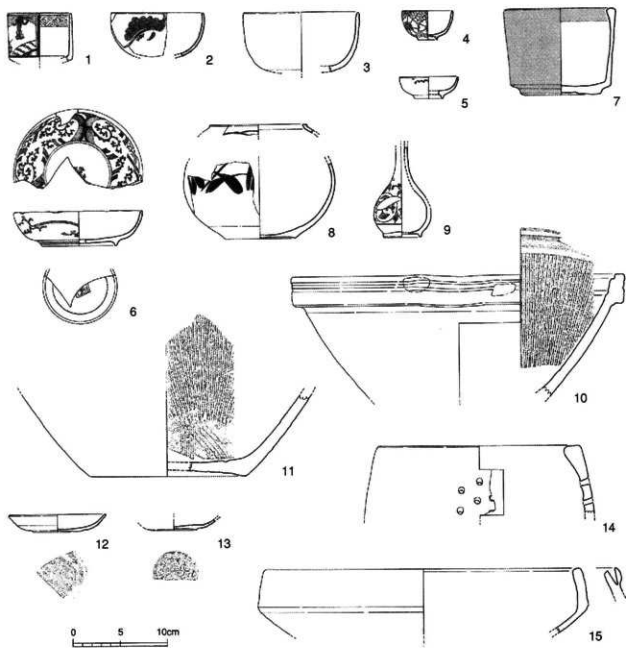


図10 B区6層遺物集中部出土遺物 (S=1/4)

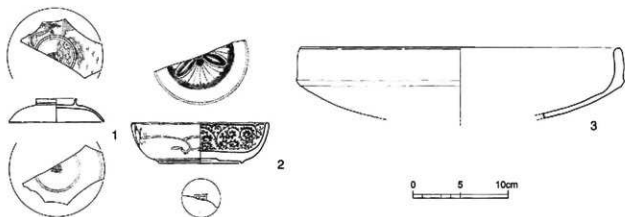


図11 トレンチ内6層出土遺物 (S=1/4)

石組 図12-1・2は肥前染付磁器碗で、1は外面に亀甲文と草花文、2は内外面に雲竜文を掻く。1の年代は18世紀前半～中頃、2は18世紀後半である。3は18世紀代の関西系陶器碗。4は肥前色絵磁器小杯で外面に海老が描かれている。18世紀代の製品である。5～9は肥前産の磁器皿で、5～8は染付、9は青磁染付で装飾されている。5は内面に牡丹唐草、見込みに梅、高台内に渦「梅」銘をもつ。年代は18世紀前半。6は内面に竹、見込みにコンニャク印判で五弁花、高台内に崩れた渦福を掻く。18世紀後半のものである。7は5層から同じ形態、文様のものが出土している。18世紀後半に比定される。8は内面に唐唐草、見込みに雲竜文をもつ大皿である。高台内の銘は「成」1字が残っており「大明成化年製」と推定される。9は肥前青磁染付大皿で見込みに若松と波が描かれ、高台内には「大明成化年製」銘をもつ。8・9は18世紀中頃～後半の製品で、ハリ支えの痕跡がみられる。10は蛇ノ目凹形高台の肥前青磁染付鉢である。内面に窓繪宝文、見込みに鶴を描き、「簡江」銘をもつ。年代は18世紀後半に比定される。図13-11・12は関西産陶器土瓶の蓋と身でセットであると考えられるものである。身には鉄絵が描かれ、ツルを取り付ける部分がナス形になっている。底部近くの露胎の部分に墨書があり「ケメケ」、「チメケ」あるいは「チはら」、「千右衛門」など読み方に数種類の可能性があるが、欠損のため全体については不明である。13は18世紀前半の肥前染付磁器深鉢と推定できるものである。外面に描かれた文様は仏手柑である¹³⁾。特殊なものであるためこの資料についてはⅢのまとめで詳しく後述する。14は18世紀代の備前系水指と考えられる。14の把手は12の土瓶同様ナス形である。15は備前系瓶の底部で18世紀以降と推定される。16～18は堺陶器播鉢である。16の口縁部内面には扇形の中に「上」の文字の入った刻印が押されている。16は17世紀末～18世紀前半、17・18は18世紀後半に比定される。19は在地産の土師質土器焙烙である。

1号石列 石列出土遺物のうち図化できたのは1点のみであった。図14-1は関西産陶器碗で外面に鉄絵で松文が描かれている。18世紀前半～後半の製品である。

1号瓦溜 図15-1～3は陶器碗で、1は17世紀後半～18世紀前半の肥前京焼風陶器、2・3は18世紀前半～後半の関西産である。3は透明釉を掛けた無文の碗で高台内に「京焼山」の刻印をもつ¹⁴⁾。4は肥前染付磁器碗蓋で外面に唐草文、見込みに兩竜文を掻き、銘は「簡江」である。18世紀後半のもの。5は瀬戸美濃産陶器鉢で見込みに目跡が残る。18世紀後半以降の製品と考えられる。6～8は肥前染付磁器皿である。6は本遺構から2個体分の破片が出土しておりその内の1点を図化したものである。残存部分から銘は「大明年製」と推定できる。7・8は内外面の文様は異なるが、ともに蛇ノ目凹形高台で見込み五弁花の、法量もほぼ同じ小皿である。18世紀後半に比定される。9は18世紀代の肥前染付磁器瓶底部である。10は肥前染付磁器で灰落しと考えられるものである。年代は18世紀代であろう。11は陶器土瓶で外面に鉄絵で倭文を掻く。18世紀後半以降の製品で肥前産と推定される。12は土師質土器の播鉢。底部は右回転糸切り難しの平底で播目は密である。灯明皿や焙烙など他の土師質土器製品とは明らかに胎土が異なるため、搬入品である可能性が高い。13・14は土師質土器小皿で前者は左回転、後者は右回転の底部回転糸切りである。左回転の土師質土器小皿は、17世紀中頃以降の江戸でみられるものであり¹⁵⁾、同じ豊後である大分市の府内城下町の調査では、これまでのところ認められていない¹⁶⁾。ただし佐伯市内では同じ城下町遺跡の天祐館跡から、糸切りではないものの回転の方向が左となる土師質土器小皿が3点出土している¹⁷⁾。15・16は土師質土器焙烙である。15は細片であったため口径等不明であるが、1カ所口縁部端部に貫通しない孔をもつ。16は口縁部を除いてほぼ完形復元できた例であり、貫通しない孔をもつ把手を有する。17～19は軒丸瓦で瓦当文様は順に九曜文、鷹の羽文、巴文である。九曜文の軒丸瓦は他に2点確認されている。これらの九曜文はいわゆる「離れ九曜」と呼ばれる細川家の家紋に似たものである¹⁸⁾。20・21は軒平瓦で、前者は珠文が、後者は均整唐草文の端の方と推定される部分が残存している。しかしいずれも一部であるため瓦当文様の全体像は判然としない。

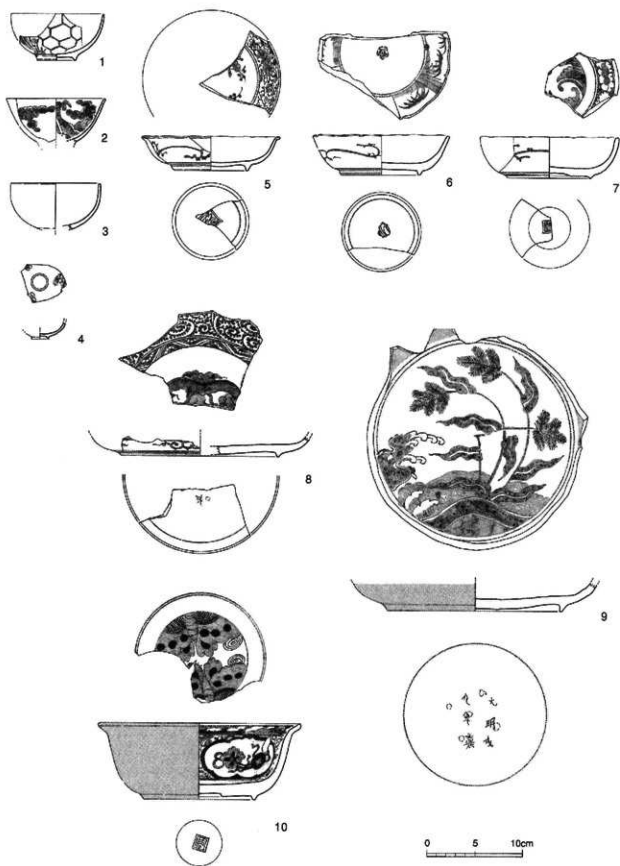


图12 B区石组出土遗物①(S=1/4)

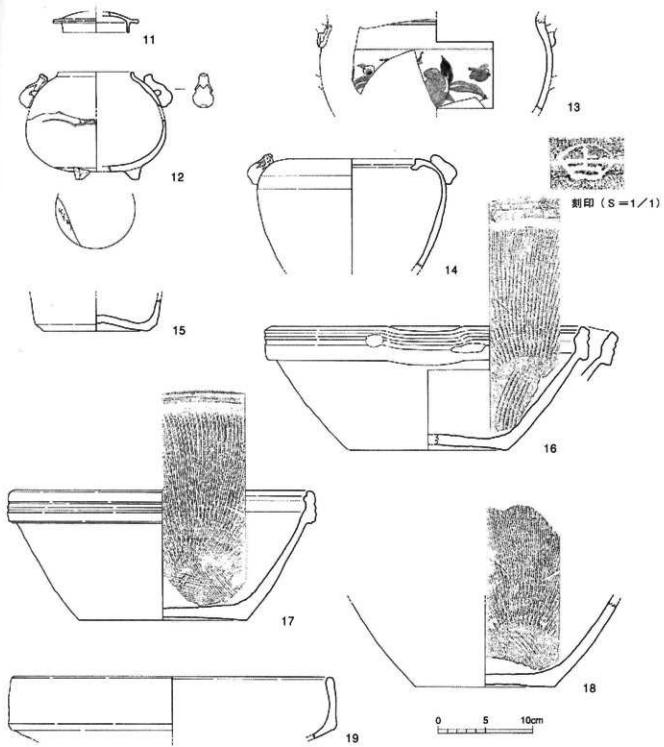


图13 B区石组出土遗物② (S=1/4)

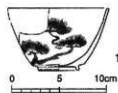


图14 1号石列出土遗物 (S=1/4)

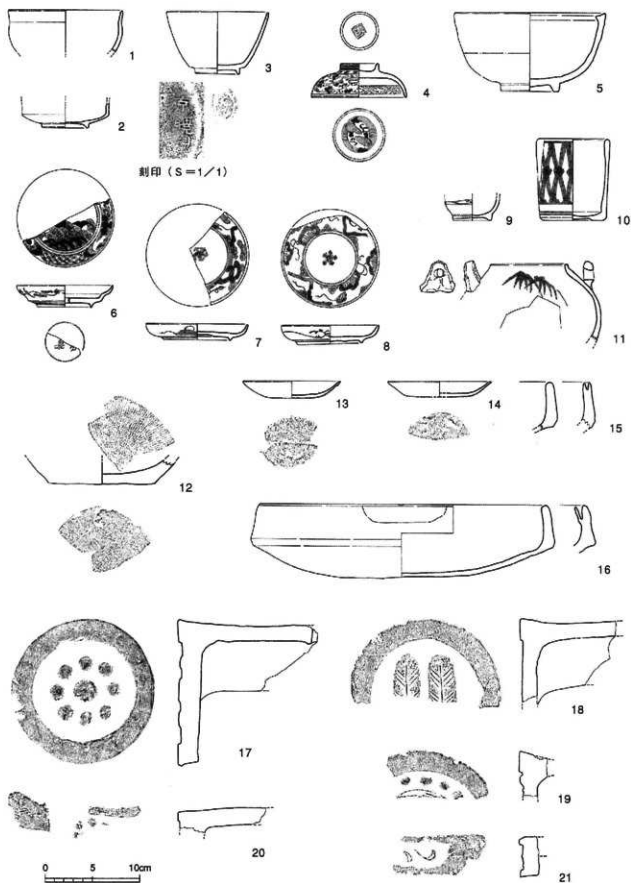


图15 B区1号瓦溜出土物 (S=1/4)

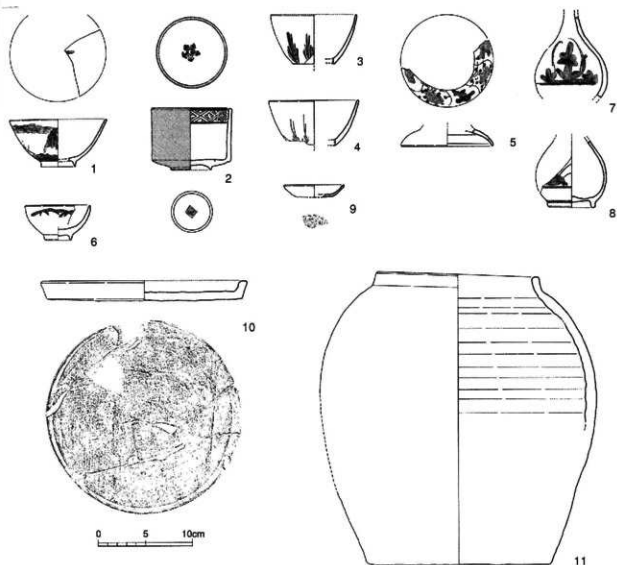


図16 B区1号土坑出土遺物 (S-1/4)

1号土坑 図16-1・2は肥前磁器碗である。1は染付で山、柳、動物を描き、2は青磁染付で見込み五弁花、「筒江」崩しと思われる銘をもつ。年代は順に19世紀前半代、1780～1810年代である。3・4は「若松碗」または「小杉碗」といわれるタイプの陶器碗である。外面に鉄で簡略化した根引き松を描く。関西産で18世紀末～19世紀前半の製品。5は肥前染付磁器蓋。1780～1810年代に否定されるいわゆる「広東碗」に伴うもので、仙芝祝寿文をもつ。6は18世紀後半～19世紀前半の肥前染付磁器紅皿である。7・8は肥前染付磁器瓶でいずれも18世紀後半～19世紀中頃に比定される。7は若松文が描かれている。9～11は土師質土器で、9は底部回転切りの小皿、10は壺または蓋、11は大形の壺である。10・11の底部には板状圧痕がみられる。10が蓋であるとすると11とセットになることも考えられる。9～11はいずれも精選された良質の胎土を使用しており、焼成の状態も非常に良いものであることなどから同一産地で生産されたものである可能性を指摘しておきたい。また在地産とした他の土師質土器とは胎土が異なる。

銅銭

図17-1～3は調査区南西隅の6層遺物集中部からの出土で、いずれも摩滅が著しく文字の判読が非常に困難なものであった。1は「元豊通寶」の行書体と推定されるものである。北宋時代の中国で造られたもので、初鑄は1078年（元豊元年）である。2・3は「寛永通寶」であるが文字がほとんど見えないので古寛永か新寛永が不明である¹¹⁾。

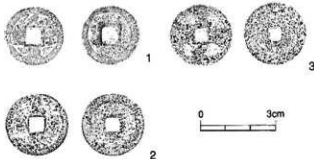


図17 B区出土銅銭 (S=2/3)

金属製品・木製品

図18-1～11はいずれも銅製品である。1・2は順に煙管順首、吸い口である。1は断面六角形を呈し脂返しが見られるタイプで、2は内部に羅字の一部が残る。3は刀の鐔の前後に取り付ける切刃で、4は鞘口金物と推定される。いずれも小刀用。5は用途不明の銅製品であるがやはり刀装具の1つと考えたい。6は刀の柄に付ける目貫と呼ばれる飾り金具で、笹をかたどったものである。7はかんざしである。8は唐草と魚子の両側に雷文が毛彫りされた飾り金具で、両端に孔がある。縁が裏側に折り曲げられていることから、孔に留め金縁のものを差し込んで何かに被せるように取り付けたものと考えられる¹²⁾。9は上部につまみのある蓋である。仏具であろうか。10は管状のものを湾曲させたもので何かの把手ともみえるが、用途は不明である。11は籠のようなものが潰れたものである。網目の部分は細い銅線をより合わせて目の形が六角形になるよう編まれており、両端が何かに掛けられるように折り返された把手様のものを2本もつ。網行燈あるいは手雪洞の類であろうか¹³⁾。12は箸の先端と考えられる木製品である。断面は四角形を呈する。

以上の銅製品、木製品は6が複層層からの出土である以外は南西隅6層遺物集中部からの出土であり、いずれも近世の製品であると考えられる。この他に鉄製品としては5層、石組、1号瓦溜から角釘が多数出土しているが今回は図化していない。その他の鉄製品については、錆が激しく原形の分かるものがほとんど確認できなかったため実測図は掲載しなかった。

註1 大分県教育委員会の高橋徹武氏に情報をいただいた。

東京都歴史文化財センター『汐留遺跡Ⅰ』1997

新宿区遺跡調査会『百人町二丁目遺跡Ⅲ』1996

2 佐賀県教育委員会の大橋康二氏に実物を見ていただいたところ、年代は18世紀代で九州産の可能性が高いが産地は特定できないとのことであった。

3 鈴木裕子「京焼出土資料の査察」『99徳島城下町研究会発表要旨 京焼—消費地出土の様相—』1999 関西近世考古学研究会・考古フォーラムとくしま

4 横山 洋「大阪の土師瓦土器」『関西近世考古学研究会Ⅳ』1999 関西近世考古学研究会

5 大橋康二「東南アジアに輸出された肥前陶磁」『海を渡った肥前のやきもの展』1990 佐賀県立九州陶磁文化館

編みか年代については、大橋康二氏にご教示いただいた。

6 大分県教育委員会の吉田寛氏に情報をいただいた。「京焼山」銘をもつ銅例が東京都の尾張藩上屋敷跡遺跡から出土しているということである。

東京都歴史文化財センター『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅲ』1998

7 小川 望「江戸遺跡出土土器の線様相」『関西近世考古学研究会』1999 関西近世考古学研究会

8 吉田 寛『府内城三ノ丸遺跡』1993 大分県教育委員会

吉田 寛『府内城下町遺跡』1999 大分県教育委員会

9 古武敦子『天祐館遺跡』1998 佐賀市教育委員会

10 丹羽基二・樋口清之『家紋大図鑑』1971 秋田書店

11 依藤幹彦「山上寺跡出土の中世遺物について出土銅貨」『熊本礼被跡開遺跡発掘調査報告書』1994 佐賀市教育委員会

12 銅例が尾張藩上屋敷跡遺跡から出土している。

東京都歴史文化財センター『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅲ』1998

13 笹間良彦『史料日本歴史図録』1992 柏書房

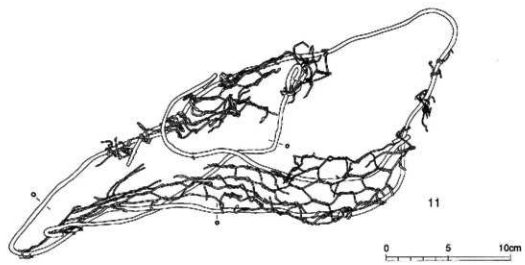
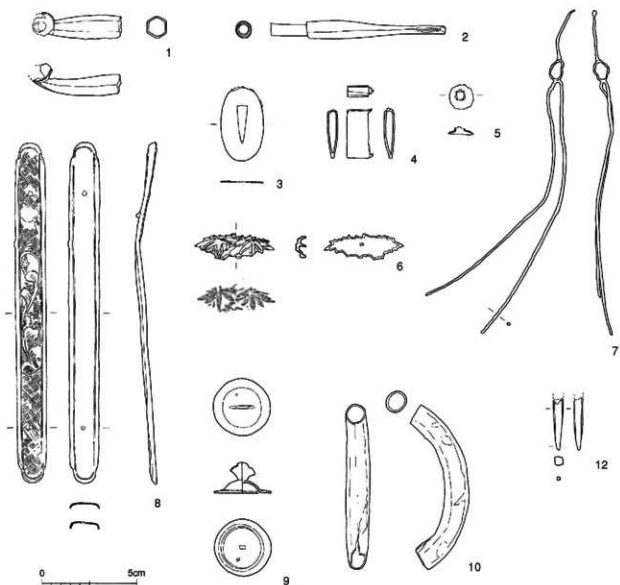


図18 B区出土金属製品・木製品 (1~10・12はS=1/2、11はS=1/3)
 1~5・7~12は6層遺物集中部、6は攪乱層から出土

III. まとめ

今回の遺跡は工事日程の関係で2回に分けて調査を行い、最初の地点をA区、次をB区として報告を行った。

A区は面積が約21m²と狭小でしかも西側が擾乱により破壊されていたため、遺構検出部分は極めて狭い範囲に留まった。遺構は地表下30cmと比較的浅いところで出土した石列3基とそれに伴う埋塞である。石列遺構は建物礎石、埋塞は出土状況から便所跡と推定した。遺構検出層は18世紀後半～明治期までの遺物を含んでいる。このことからこの層が近代以降の整地層であると想定され、遺構の年代は明治期を測ることはないと考えられる。A区については明治期整地層の下層から遺構は出土しなかった。

B区はA区から4mほど北に離れた地点に設定した面積約59m²の調査区である。18世紀後半の整地層である5層中から石組5基、瓦溜1基、廃棄土坑1基、5層上面からコの字状石列が出土した。年代決定に必要な遺物も各層ごとに比較的多く出土したため、4層が近代以降の整地層、5層が18世紀後半に造成された整地層であるとともに、5層上面が18世紀後半～19世紀中頃の生活面であったことが確認できた。石組は配置と構造から礎石下に埋設する根固め石である可能性が高く、5層造成後建てられた建物の基礎と考えられる。下層の6層は干潟であった層(砂層)なので地盤がゆるくこのような沈下対策が必要であったのであろう。同じ佐伯城下町遺跡内の天祐館跡でも同様の石組が多数出土しており、指図から南御殿(天祐館)の基礎であったことがわかっている。佐伯城下町は埋め立てによって築かれたため、建物の安全対策のためにこのような手厚い工事が施されたと考えられるが天祐館は藩主の別邸、本遺跡は上級武士の屋敷跡であり、下級武士の住居あるいは町屋など住む人間の身分の違いによって出土遺構に差があるのかも今後注意すべき点である。

ここでB区各層とA区との関連を考えると、A区遺構検出レベルは4層上面とはほぼ同じであり、出土遺物の年代も含めて4層整地以降に構築されたものであると推定できる。

調査地点は残存する絵図によると、元文3年(1738)から幕末まで上級武士である小林家の屋敷であった。調査の結果、この土地は18世紀後半に整地し直され新たに建物が建設されたことが確認されている。とするとこの整地は絵図が描かれた元文3年と文政9年の間に行われたことになる。そこで2枚の絵図を比較すると、文政絵図では元文絵図にはない道路が屋敷の南側に通され、しかも敷地内だったところに新たに5軒の住居が造られている(図19)。このように18世紀前半から19世紀に移行する間に、小林家の敷地は縮小され屋敷割が大きく変更されたことがうかがわれる。今回の調査結果は新旧の絵図に記された小林家敷地の変更が18世紀後半に行われた可能性を示唆するものとして注目される。では何故この時期にこのような土木工事が行われたのであろうか。記録によると寛政10年(1798)に大手付近から船頭町までの広範囲を消失する大火があり、この時に調査地点周辺も焼けた可能性がある¹⁴⁾。5層が焼土や炭を多く含む部分をもつこと、遺物の年代も齟齬をきたすものではないことをその傍証と考え、次のような仮説が立てられる。(1)寛政10年の大火で調査地点を含む広い区域が消失した。(2)藩は城下を再建するにあたって新たに整地を行い、何らかの理由で土地区画の変更を行った。ただし、出土遺物の中に2次的に被熱したものがほとんどない点に疑問が残るため現時点ではあくまで仮説の域を出ない。

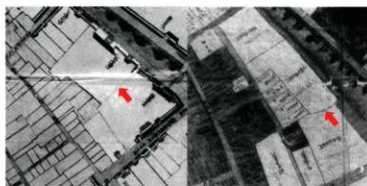


図19 元文3年絵図(左)と文政9年絵図(右)
(矢印で示した部分が小林家屋敷)

次に本遺跡出土遺物の中で特殊なものについて触れておきたい。B区石組出土の肥前染付磁器深鉢(図13-13)は本来輸出用に生産されていたものである。完形品は1ないし2個の把手が付き蓋をもつ。17世紀ものでは口縁部から胴部にまたがるように1個把手が付き、18世紀第2四半期から後半の粗製品には胴部に2個付くということである。外面には牡丹文と仏手柑文が染付され、身の口縁部内側には緑取りのように花唐草文を描く(図20)。

本遺跡出土の鉢は把手の位置は新しいタイプに近いが、文様は古いものに似ているため18世紀前半の年代が与えられた。本品の主要な輸出先はヨーロッパであったが、インドネシアのバサリカン遺跡、バンテン・ラマ遺跡からも出土しており東南アジアにも輸出されていたことが知られている。バサリカン遺跡はジャカルタの旧運河跡を発掘したもので、オランダ東インド会社に関係する多くの



図20 肥前染付磁器深鉢（バンテン・ラマ遺跡出土）
『海を渡った肥前のやきもの展』より転載

の遺物が発見されその中に肥前磁器も含まれていた。バンテン・ラマ遺跡は16世紀後半～18世紀中頃にかけて栄えたバンテン王国の王都で、発掘調査によりかなりの量の肥前磁器が出土している。興味深いのはヨーロッパでのこの鉢の用途がトレポットだったのに対し、インドネシアでは飯櫃として使用されたという説がある点である¹⁶。本遺跡出土のものがどちらの用途で使用されたのか、あるいはまったく別の用途に用いたのか、それ以上に何故このように特殊な製品が佐伯に持ち込まれたのか興味は尽きない。天祐館遺跡でも輸出向けに作られていた染付美器手皿が数点出土しており¹⁷、磁器が徐々に普及する中で珍しいものを手に入れたという需要が地方の城下町にもあったのであろうか。いずれにしても日本国内では磁器生産地の佐賀県と南蛮貿易の中心であった長崎以外での出土は珍しい例である。

最後に本文では掲載しなかった擾乱層出土遺物の中の1点を紹介したい。図21は肥前青磁染付輪花皿である。上手の製品で見込みに濃く鮮やかな呉須で大輪の牡丹を描き、内、外の側面には青磁釉を掛ける。年代は18世紀前半～中頃のものである。注目されるのは高台内に「立林九良左エ門焼極上」という銘をもつことである。立林家は佐賀県有田町にある下南川原山の窯元である。下南川原山とは江戸時代の窯場の名称で現在の杉右衛門窯跡、南川原窯ノ辻窯跡がこれに当たる。この窯場は寛文ごろに鍋島藩の御道具山が置かれていたと推定されているところで、上手の製品を多く製作していた。「立林」という名は酒井田杉右衛門家に伝来する土型に残っており¹⁸、さらに『浄源寺過去帳』に記載されている下南川原山の人名の中に「小助親九郎左衛門」とある¹⁹。しかし過去帳の九郎左衛門が死亡したのは元禄7年（1694）であり皿の作られた年代より前であることから、過去帳の人物と銘の九郎左衛門とが同一人物であるのか不明である。本品の類別としては上南川原山の樋口3号窯第3期層（18世紀）から、牡丹の意匠がよく似た青磁染付皿が出土している。銘は「大明成化年製」である。

最後に本報告書を執筆するにあたり、大橋康二氏（佐賀県教育委員会）、高橋信武氏、吉田寛氏（大分県教育委員会）にご教示いただきました。また遺物実測の一部については阿部みゆき氏（有限会社社企向）にご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

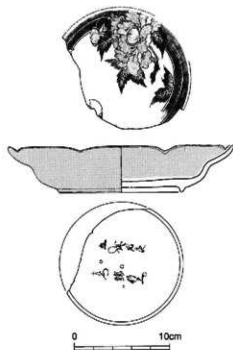


図21 B区擾乱層出土青磁染付輪花皿（S=1/4）

註1 佐賀市教育委員会『佐伯市史』1974

2 大橋康二氏にご教示いただいた。

大橋康二『東南アジアに輸出された肥前陶磁器』『海を渡った肥前のやきもの展』佐賀県立九州陶磁文化館 1990

3 佐賀市教育委員会『天祐館遺跡』1998

4 大橋康二氏にご教示いただいた。

佐賀県立九州陶磁文化館『柿右衛門様式総合調査事業報告書』1999

5 有田町『有田町史 古窯編』1988



A区全景



A区石列遺構



A区土瓶出土状態



A区3号石列・埋裏



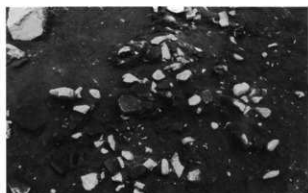
B区全景



B区1・2号石組



B区3号石組



B区4号石組



B区1号瓦溜



B区1号石列



B区1号土坑遺物出土状態



B区かんざし出土状態



B区6層遺物集中部

写真図版 3



A区出土遺物 1~6



B区4層出土遺物 1~12



B区5層出土遺物 1~11



5層 13・16・17



5層 14



5層 15



B区6層出土遺物 1~9・1・2



B区石組出土遺物 1~8



石組 9・10



石組 13



石組 11・12・14・15



石組 16・17



16 刻印



B区1号石列 1



B区1号瓦溜出土遺物 1~11



3 「京映山」刻印



1号瓦溜 12~16



B区1号土坑出土遺物 1~8



B区攪乱層出土青磁染付皿



B区出土金属製品・木製品 1~10・12



金属製品 11

写真図版 5



A区 6 「大學目薬」 「参天堂薬房」



B区 5層 18~21



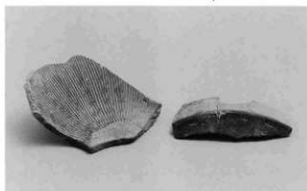
5層 22



B区 6層 10・11



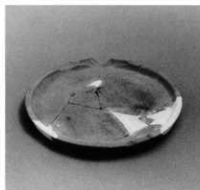
B区 6層 12~15・3



B区 石組 18・19



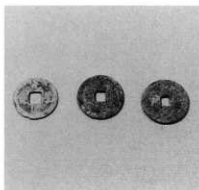
B区 1号瓦溜 17~21



B区 1号土坑 10



1号土坑 11



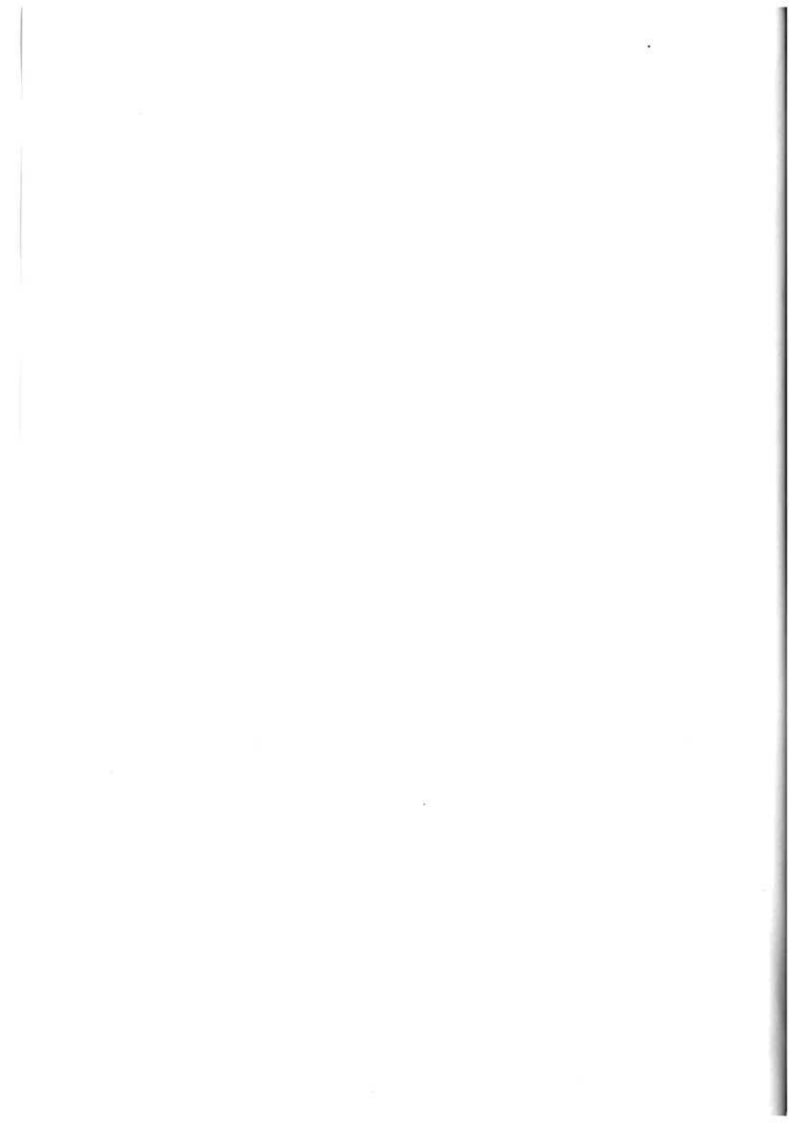
B区 出土銅銭 1~3

報告書抄録

書名	佐伯城下町遺跡 西田病院駐車場地点
副書名	病院施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	—
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編著者名	吉武 牧子
編集機関	佐伯市教育委員会
所在地	〒876-8585 大分県佐伯市中村南町4番1号
発行年月日	2000年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
佐伯城下町	大分県佐伯市	430	012			98.05.14 ～20	21.3m ²	病院施設 建設
西田病院	大手町3丁目					99.03.03 ～31	59.0m ²	
駐車場地点	132番2							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐伯城下町 西田病院 駐車場地点	武家屋敷	近世	石組 石列 瓦溜 土坑	近世陶磁器・土器 瓦・金属製品 木製品 ガラス製品	攪乱部分から高台内に竊元の 名を記して銘とした肥前産青 磁製付皿出土。



病院施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

佐伯城下町遺跡

西田病院駐車場地点

2000年3月31日

発行 佐伯市教育委員会
〒876-8585 大分県佐伯市中村南町4番1号
TEL 0972-22-3111

印刷 (有)勉強堂美術精版社
〒876-0832 大分県佐伯市船頭町2番52号
TEL 0972-22-1324